

稲賀繁美 異物を抱えた真珠貝の分泌に造形の理路を探る（書評）

日本語で書かれた造形論として、歴史に残る名著「橋本真之『造形的自己変革』美学出版、二〇一六年」である。過激なる陶芸家の中村錦平は、本書中僅か一頁の短編「茶碗考」を『南方録』の衣鉢を継ぐ洞察と絶賛している。だが本書は安易に書評を許さない。著者との真剣勝負を受けて立つ覚悟が求められるからである。

まず、著者の紡ぐ日本語の的確さ、語彙の鋭さは尋常ではない。「言葉は切れ味鋭い刃物に似ている」。その事実を著者は「造形」の「素材」たる鉄板や銅板との「格闘」から体得した。だがここで括弧に括った何気ない日常用語ひとつひとつが、鍛金の場対峙し、絞り込むと、解体されてゆく。常人の無感覚や鈍感さが、著者には耐えがたい不快感を呼び覚ます。

本書には著者幼少時以来の体験が、いかに成熟して回顧されたかが随所に披瀝される。枝から落ちて迷子になり気絶した雀。著者の掌から飛び去ったその「小さな温もり」。蟬の抜け殻。大学構内の空き地に棲息していた、得体の知れない薄黄色の球体。それは茸の「鬼フスベ」と判明するが、当初の違和感は著者の心の内にいつまでも残留する。さらにまた事故で失われた漁師の片腕。肘の上あたりに残る肉塊は、今でも失われた指を動かす。あるいは林檎。これには、評者にも似た経験がある。欧州の寄宿寮で昼食の西洋梨を窓辺に放置しておいた。窪んで皸枯れた残骸からは、ある秋の日、高級な酒精の香が立ち昇っていた……。

頭脳の描く設計図が事前であり、腕力でそれにそって「造形」するのではない。となれば鍛錬の相手は「素材」などとは呼べまい。鉄は舐めると血の味がする。銅板は鉄より柔軟だが、槌を抜こうとすると粘りついて抵抗する。それぞれの物質は厚みと季節で性格を変え、肉体に異なる影響を及ぼす。両者の闘ぎ合いとしての造形の奔流に身を任せば、世の中の因習を突破する。だが「丁寧」に問題を熟視徹底すれば「世を律する規則の「根底が揺らぐ事態に至る」。その両極のあいだの揺蕩を、あえて妥協とは呼べまい。仕事の条件がそこに姿を現し、その空隙の間に「作品」が無限増殖の生成を遂げてゆく。

だがその揺れをどう語るのか。「常套句で語れるほどのことであるなら、あえて語るほどのことではない」。自我を素材に押し付けるのでもなく、素材と戯れる慣習を無我と錯覚する誘惑をも退ける。両者の隘路に拓かれる道が「造形」であり、それを手の内に思考する。それが「私の前の銅」と「私の右手の金槌」なくしては始動しえない「造形思考」の姿である。

それはあるいは体内にゆつくりと結石を育む営みであり、貝類が自らの分泌物として真珠を成長させる過程にも似る。そのさなかで「存在の上澄み」として「手の思想」も顕現する。造形が作者の自由であるかに振る舞うのは欺瞞だと著者は言う。方法を選ぶ自由とは、不自由を選択する自由である。素材には固有の方法が潜在し、固有の理路が発汗するように滲み出し、やがて分泌物のように形をなしてゆく。地殻変動の隆起や陥没のように。

この視点から著者は、形態の完成を踏み抜いたミケランジェロの無体に感嘆し、非人情な離人症のうちに感情を統御するファン・ゴッホの清澄な自己把握に脱帽する。生ける人体の1cmの裡に全宇宙を捉えたジャコ

メッテイ、その「失敗に向けて蕩尽されつくした、孤立した願望の生」への著者の讃仰も、そこにある。反対に感覚の鈍磨を許容する自我の怪物的肥大に、著者は疑問を呈さずにはいない。スポーツの勝敗は、規則を無前提の柵しがらみとして、根拠を問わずそこに幽閉された保守主義者の墓標である。時代を隔てたふたりの勇者が両者の絶頂を直に対峙することは能わない。その真理がスポーツ史からは捨象される。ここで著者の悟達ごたつは、東洋的な諦観と求道にも開かれていることが、たまさかに窺える。

著者は牧谿の「寒山・拾得」を見て、自我の消去を求める人物をいかに描出できようか、と自問する。作品の存立はこの瞬間に「喉元にし首を突きつけ」られる。作品は所詮「時の碾臼」にかけられ「徹かに崩壊に向か」い「摩耗の末に無塵に帰す」。その必然を前にして「存在の上澄み」は作者と物質存在との間に「默契」として立ち昇る。そこを誤魔化すと「作品」は「標本」と化す。標本に偽りの永遠を託す姿勢は、著者には背徳と映る。「自らによつて造形史を屈折する強度を持ち得るか？」著者はそこに、追隨者や現状肯定者、あるいは局外者とは訣別すべき掟を見定め、世間に渦巻く「表現の欺瞞」への自戒とする。

「人は何か他愛のないものと接触しながら自意識の充足する場を育てて行く」。その訓育の道程がここには誠実に、聊か頑固に、しかし諦念とともに珠玉の言葉によつて綴られている。